
my world

うわっほい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

my world

【Nコード】

N8364Z

【作者名】

うわっほい

【あらすじ】

愛と勇気と感動と笑いとその他もろもろがつめこまれてるかもしれないファンタジー！

暴力的な場面が苦手な方は控えめに。残酷な描写の範囲をあまり理解していませんがそこまでヤバイもの（頭がパーン！など）はない・・・と思います。

my world start

どうしてこうなった。

気づいたときには、俺は漫画などでありがちなファンタジー世界に迷い込んでいた。

時は20分前。

俺の名前は わたなべ 渡辺 ゆう 勇 高校生である。

いつもどおりに学校へ行き

いつもどおりに授業を受け

いつもどおりに家に帰ってるときだった。

「やっべ！雨降ってきた！」

朝、今日は一日中快晴だと自信満々にテレビは言っていたが完全に外れてしまっている。

どこかで雨宿りという手段もあったが、この住宅街にはそんな場所はない。

「・・・仕方ないか」

90度体を方向転換し狭い路地に入る。少し汚いが、立派な近道である。

「気味悪いからあまり通りたくないんだよなあ・・・」

ダッシュで駆け抜けようとしたときだった。

「うわっ！」

路地の真ん中に扉が仁王立ちしていた。突っ込む寸前にギリギリストップ。

「なんでこんなところに扉が・・・」

もちろんドアの裏側には路地の続きがなく、建物などなかった。

・・・待てよ？

これは、アニメでよくある開けたら好きな場所にいけるとかいう「どこで ドア」じゃないのか!?

100億分の1程度のその確率を信じ、扉を開けた。

今ではそんなこと信じずに、ただその扉を横にどかせばよかったと後悔している。

俺の冒険が、始まろうとしていた。

my world start (後書き)

感想、コメント、アイディア、その他もろもろなんでも募集なう

2話「初めての着地」

扉の先にマイホーム（といってもマンション）か、ただの扉で終わりか、どっちかだと思っていた。
行き先は・・・

「あれ？どこだここ？」

0.5秒で体が異変に気づく

「え・・・ってうわあああああああ！！！」

そこは上空。それも果てしなく上のほうだった。

以前に一度、バンジージャンプならしたことがあるが、今は背中にヒモはついていない。

徐々に加速していきながら落下。

落ち着け。たとえ落ちたとしても下が砂漠とか水だったら命ぐらいは助かるんじゃないのか？

下をバツと見てみた。

岩、大きな岩、とがった岩、きれいな岩。

「俺の人生おわったあああああああ！！！」

！？

よく見ると、大きな岩ととがった岩の間に川がある。

上空で体を動かし、必死にその川の方に体を動かす。

「間に合えええええ！！！」

目の前にとがった岩の先端が一瞬移り、そして水の感触とともに意識は薄れていった・・・

2話「初めての着地」(後書き)

ユウさんはたとえ落ちてる間でも意外と考えれる人。

3話「困惑と出会いと」

ずいぶん流されて、意識は復活した。

家に帰ったらこの勇さんの武勇伝をツイッターで報告するんだ・

・
空中でのフラグ回収に失敗し、川の端にある小さな岩によじ登った。

「・・・状況を整理しよう」

頭の中でさまざまな場面が思い出される。

学校からの帰り道、雨が降ってきた。

傘が無いので、急いで帰ろうと近道の路地に入ったら扉があった。

好奇心で開けたらこうなった。

「・・・」

3番目に疑問しか感じられないが、今はこれ以上の説明のしようが無い。

「プラス思考に考えよう・・・」

その結果、プラスなことといったら明日学校いなくていいということだけだった。

やれやれ・・・と考えることをやめ、岩の上で横になり休憩を始めた。
いつの間にか、眠っていた・・・

ドン！

急に体に衝撃が走り、目を覚ました。

「・・・」

体の上に女の子、しかもかなりかわいい。

近頃、変な事だらけでついに幻覚が見えてきたのか・・・と自分の

精神に寿命が来ている事を悟った。

寝よう。もう一回寝れば直るはずだ。と再び目を閉じた。

「ちよっと！寝てないで助けてよ！」

幻聴か、ここまでくると逆に自分がすごく思えてくる。

「ウガアアアアアアアアアア！！！」

幻ちょ・・・

ガバっと体を起こすと、さっきの女の子、それとゲームでありがちな怪物がいた。

「早くアイツなんとかしてよぉ！」

幻覚系女子に頼まれても・・・と思ったが自分もピンチ（精神的にも）であることに気づき身を起こした。

この女の子も、怪物も幻覚でもなんでもないと知るのには、時間がかかった。

3話「困惑と出会いと」(後書き)

女の子との出会いなんてすべて幻覚!!と思ったら負け。

4話「必殺技、炸裂！と女の子、ティアラ」

「うおおおおお！！」

秘伝、ライダーキック！

怪物は俺の突然の不意打ちに反応することすらできず、川に落ちて流されていった。

それよりも不思議に思ったことは「蹴れた」こと。つまり触れる。つまり現実・・・

「こんなのゲームの中だけで十分だああ！」

現代社会の2次元を夢見るボーイ達に伝わってほしい。

「あ・・・あの・・・」

声を聞きそういえばと思いながら後ろを振り向くと例の幻覚系女子、いやこれも現実なんだろう。

「た、助けてくれてありがとう。私ティアラって言うの。あなたは？」

何このゲームでのヒロインとの出会い方1位に出てきそうな流れは。

「勇だ。ちなみに一つ聞かせてもらうがここはどこだ？」

ここでは 渡辺 はつけてはいけない気がする。この異次元にいる間はその苗字は捨てよう。

「ユウさんですね。ここはアガスリア王国内のルナ川の下流の方です。」

アスガリア王国・・・

「そ、それで、もしよかったら隣町までついてきてもらえますでしょうか・・・ここまでたくさんモンスターがいるなんて知らなくて・・・」

その選択肢は「はい」か「YES」しか存在しないぞと思いながら、承諾した。

その答えにティアラが喜んでいる姿からは何か違和感が感じられた

が、そんなわけないかと思過ごすことにした。

4話「必殺技、炸裂!と女の子、ティアラ」(後書き)

「こんなのゲームの中だけで十分だああ!」これユウさんの名言。

5話「引き取り」

ティアラのいう隣町に着いた。名前はユーテン町。

時刻はすでに夜の8時半（ちなみに一日が24時間なのは同じらしい）

「ユウさん。私がお金をだすので今日は宿に泊まってってください。」

よく考えたらサイフはもってるがもちろんすべて使えない。本望ではないがお言葉に甘えさせていただくことになった。

部屋に入るなり、一日の疲れがドツと増したのかすぐに眠りについてしまった。

よく考えてみたらティアラと同室。でもこの世界では男女同室は普通なのか。

そんなことより早く家に帰りたい・・・

夜中に目を覚ました。原因はあの空中での疲れだと思う。

首を傾けると視界の先にはティアラのベッドがある。これなんてエロゲかと思ったときだった。

「ティアラがいない・・・!？」

身を起こし、部屋を見渡すが、どこにもティアラの姿は無かった。きつとトイレだろうと思う反面、危機感を感じ、部屋の外にでると、そのときだった。

「約束どおりちゃんと連れてきました」

宿屋の外から声が聞こえた。それもティアラの。

「うむ、よくやった。明日の朝7時ごろに引き取りに行くから部屋から絶対だすなよ・・・」

男の声が聞こえた。引き取る・・・って俺のことか!？

「それで、約束は守ってくださいますよね!」

「ああ、取引は守るのが我々魔族だからな。それではしっかり見張つとけよ」

戻ってくる気配がしたので急いで部屋に入り布団の中に飛び込んだ。

明日は朝4時に起きよう・・・

5話「引き取り」(後書き)

どうする！勇！

6話「うそつき女は騙されやすい」

朝になった。昨日のことが頭からはなれず、ガバッと身を起こす。
「・・・寝過ごしたあああああああ！」

時間は6時、話によれば7時に俺は売られるらしい。
部屋を見渡すがティアラの姿は無い。

やはり部屋に鍵をかけられていた。

そこは3階なので窓から出ることもできない。

「ティアラ・・・」

情報収集のためだといってホイホイ美少女についていくのは失敗だった。

考えてみると最初の出会いは無理やり作り上げられたものだったのか。

脱出ゲームなら今まで何回もやってきたが、リアルは初めてである。
しかもゲームと違って脱出できるように仕掛けは組まれていない。
それでも、あと一時間でここから出るしかなかった。

「そろそろですか・・・」

部屋の外でティアラは例の引取り人が来るのを待っていた。

「ユウさん、ごめんなさい。これしか方法は無かったの。」

ドンガラガツシャアアン！！

突然部屋の中から爆音が響く。

ティアラは驚いて部屋を空けて中を見た。

「い、いない・・・！？」

飛び降りでもしたのかと窓の方に駆け寄ったときだった。

「別に脱出なんかしなくても外からドアを開けさせればいいだけの話だったねー」

ティアラが振り向くと、扉のところに・・・

「ユウさん!!」

「さて、時間もなしし全部話してもらおうか!」

6話「うそつき女は騙されやすい」(後書き)

部屋の壁にガラスの置物を投げつける。

これだけで脱出できるというさすがユウさん。

7話「時すでに遅し」

「・・・というわけです」

省略してしまったがこういうことらしい。

ティアラは実はここアガスリア王国のお姫様。

魔族に一ヶ月に30人の人間を差し出さなければ戦争をすると脅された。

しかしそれは不可能に等しかったため、魔族に代わりの条件を言い渡される。

それが、俺を売ることらしい。

「戦争・・・勝てばいいんじゃないの？」

ティアラは即答した。

「駄目です。今まで魔族に勝てた国など一つありません。」

そこまで強いのか・・・

「だから、どうしてもあなたを彼らに渡さなければならぬのです！ そうしないと大切な国民が・・・」

見ず知らずの旅人（そう言い通している）の命よりも国民月30人を大切にする。

正しい判断だとは思うが、納得はしきれない。

「大体なんでその・・・魔族は俺を欲しがるわけ？」

「それは私にもわかりません、でも生きてつれて来いと言われたので、きつとなにかの役にたつのではないでしょうか？」

結論、選択肢は二つになった。

一つはティアラの言うことを聞き魔族にわが身を差し出す。

もう一つは逃げることだ。もともと俺の知ったことじゃない。

どちらも選びたくないがどちらか選ばなければいけない。

俺が高校を選ぶときよりも迷うことだった。

「あっ！」

ティアラが急に叫び、俺の後ろを指差す。

殺気。全身に寒気が走り部屋の中に飛び込んで距離をとった。入り口の方を見ると、そこには一人の男が立っていた。

「見つけたぞ・・・ユウ！」

7話「時すでに遅し」(後書き)

宿屋の主「3階がさわがしいのう．．．」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364z/>

my world

2011年12月26日22時59分発行